

This Page Is Inserted by IFW Operations
and is not a part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

**As rescanning documents *will not* correct images,
please do not report the images to the
Image Problem Mailbox.**

09/786309

PCT/JP 99/01227

12.03.99

日本国特許庁

PATENT OFFICE
JAPANESE GOVERNMENT

REC'D 30 APR 1999

WIPO PCT

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日
Date of Application:

1998年 9月 3日

出願番号
Application Number:

平成10年特許願第249392号

出願人
Applicant(s):

科学技術振興事業団

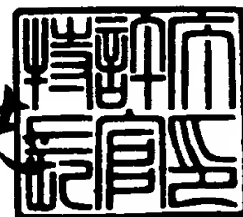
PRIORITY
DOCUMENT

SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH RULE 17.1(a) OR (b)

1999年 4月16日

特許庁長官
Commissioner,
Patent Office

伴佐山 建志



出証番号 出証特平11-3022963

【書類名】 特許願

【整理番号】 PA906144

【特記事項】 特許法第30条第1項の規定の適用を受けようとする特許出願

【提出日】 平成10年 9月 3日

【あて先】 特許庁長官 伊佐山 建志 殿

【国際特許分類】 C12N

【発明の名称】 ソラレン誘導体による高効率変異法

【請求項の数】 7

【発明者】

 【住所又は居所】 東京都江東区越中島1-3-16-704

 【氏名】 三品 昌美

【発明者】

 【住所又は居所】 東京都文京区向丘1-10-6-203

 【氏名】 安藤 秀樹

【特許出願人】

 【識別番号】 396020800

 【氏名又は名称】 科学技術振興事業団

 【代表者】 理事長 中村 守孝

【代理人】

 【識別番号】 100102668

 【弁理士】

 【氏名又は名称】 佐伯 憲生

 【電話番号】 03-5205-2521

【手数料の表示】

 【予納台帳番号】 039251

 【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

 【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【ブルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 ソラレン誘導体による高効率変異法

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 ソラレン誘導体を用いて脊椎動物の遺伝子を変異させる方法

【請求項 2】 ソラレン誘導体がトリメチルソラレンである請求項 1 に記載の方法。

【請求項 3】 脊椎動物がゼブラフィッシュである請求項 1 又は 2 に記載の方法。

【請求項 4】 遺伝子が生殖細胞の遺伝子である請求項 1～3 のいずれかに記載の方法。

【請求項 5】 変異させられた部分がピリミジン塩基を含有する部分である請求項 1～4 のいずれかに記載の方法。

【請求項 6】 請求項 1～5 のいずれかに記載の方法のより変異した遺伝子を製造する方法。

【請求項 7】 ソラレン誘導体を用いて遺伝子のピリミジン塩基を含有する部分に変異を生じさせ、当該変異遺伝子を発現させてその相関により、脊椎動物の遺伝子の機能を解析する方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、ソラレン誘導体、好ましくはトリメチルソラレンを用いて脊椎動物、好ましくはゼブラフィッシュの遺伝子を変異させる方法、その方法により変異させられた遺伝子を製造する方法、及び、その方法を用いて脊椎動物の遺伝子の機能を解析する方法に関する。

【0002】

【従来技術】

最近数年の間に、脊椎動物の発生機構に関与する因子を網羅的に単離しようと、ドイツ・アメリカが中心となってゼブラフィッシュ (Zebrafish) を使った大

規模なミュータントスクリーニングが行われ、発生に関わる数百の遺伝子が報告された (Driever, W. et al., (1996) *Development* 123, 37-46.; Haffter, P. et al., (1996) *Development* 123, 1-36.)。

【0003】

このプロジェクトに使用された変異原 (ミュータントの変異誘発をもたらす物質) は、N-エチル-N-ニトロソ尿素 (ENU) で、これは遺伝子を構成する1個の塩基を別の1塩基に置き換える作用を持つ。従って、その効率の高さというメリットと同時に、その微細な変異を手がかりに目的の変異遺伝子を同定しクローニングすることが難しいという欠点も併せ持っている (Postlethwait, J. H. and Talbot, W. S. (1997) *Trends Genet.*, 13,)。

【0004】

一方で、遺伝子クローン化指向型の手法として、Hopkins のグループはレトロウイルスベクターを染色体に挿入させて遺伝子を破壊するという、エレガントな挿入変異法を開発した (Gaiano, N. et al., (1996) *Nature* 383, 829-832.)。挿入されたベクターはその配列が既知であるためそれを指標にベクター周辺の染色体領域も同時に回収できた。しかし、その効率は少なくともENUの数十倍低く、網羅的規模の変異作成には適さなかった (Postlethwait, J. H. and Talbot, W. S. (1997) *Trends Genet.*, 13,)。

【0005】

他のひとつのアプローチとして、染色体欠失変異法が挙げられる。このアプローチによる欠失はそれ自体が変異遺伝子をクローン化するための目印となるという長所を有している。リプレゼンティショナル デファレンス アナリシス (RDA, Representational Difference Analysis) (Cimino, G. D., Gamper, H. B., Isaacs, S. T. and Hearst, J. E. (1985) *Psoralens as photoactive probes of nucleic acid structure and function : organic chemistry, photochemistry, and biochemistry. Annu. Rev. Biochem.* 54, 1151-1193) などの方法によるこのアプローチは、それは威力を発揮する。これまでに、ガンマ線やX線照射が染色体欠失を引き起こすことは知られていた。しかし、それらの誘発する欠失は大きく、また染色体の破壊を伴うものなので、単一の遺伝子座といったレ

ベルでの変異の単離は難しく、それらの方法ではゼブラフィッシュの染色体に大きな欠失や破壊をもたらし、詳細な変異の研究するためには適当ではなかった (Chackrabarti, S. et al., (1983) Genetics 103, 109-124.; Mullins, M. C. et al., (1994) Curr. Biol. 4, 189-202.)。

【0006】

また、遺伝子の変異による発生機構の解明は、発生因子の単離や同定のみならず、脳などの各器官の発生と機能及びそれらに関与する遺伝子の機能を知る上で、強力な遺伝学なアプローチとなると考えられている。とくに脊椎動物における体系的な遺伝学的な解析が非常に重要になってきている。ゼブラフィッシュは脊椎動物のなかでも多くの長所をもち、その脳などの器官の発生は成長する透明な胚の中で急速に進んでいのが観察できるからである (Stuemer, C. A. O. (1988)

Retinotopic organization of the developing retinotectal projection in the zebrafish embryo. J. Neurosci. 8, 4513-4530)。

【0007】

一方、DNAの架橋試薬として知られているトリメチルソラレン (4,5',8-trimethylpsoralen) (以下、TMPと省略する。)が、大腸菌 (*Escherichia coli*) や線虫 (*Caenorhabditis elegans*) において高頻度で小さな染色体欠失を引き起こすことが知られていた。

【0008】

【発明が解決しようとする課題】

そこで、脊椎動物、特にゼブラフィッシュにおける、高頻度かつクローニング可能な新しい遺伝子変異系 (mutagenesis system) の開発が求められていた。

本発明者らは、特定遺伝子座の変異頻度測定と試験的スクリーニングの結果、TMPにより脊椎動物においても変異が生起することを確認し、TMPによる変異法が効率的であることを確認した。更に、実際にTMP変異法が機能していることを確かめるため、本発明者らは本法でとられた神経系に特異的な異常をもつ変異体を解析し、これらの結果は、TMP変異法が、脊椎動物特にゼブラフィッシュの変異体を単離し分子レベルで解析するための効果的方法であることを見出し本発明を完成した。

【0009】

【課題を解決するための手段】

本発明は、ソラレン誘導体、好ましくはトリメチルソラレンを用いて脊椎動物、好ましくはゼブラフィッシュの遺伝子を変異させる方法、及び、その方法により変異した遺伝子を製造する方法に関する。

【0010】

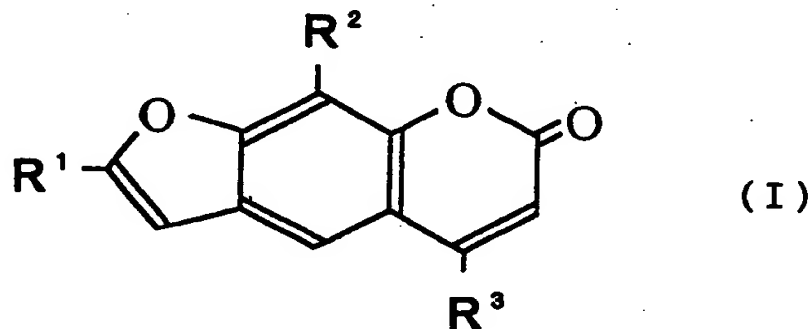
また、本発明は、ソラレン誘導体を用いて遺伝子のピリミジン塩基を含有する部分に変異を生じさせ、当該変異遺伝子を発現させてその相関により、脊椎動物の遺伝子の機能を解析する方法に関する。

【0011】

本発明のソラレン誘導体は、紫外線やX線などの照射によりDNAなどの核酸に架橋を生じさせる機能を有し、その後当該架橋部分を包含する部分を欠失させることができる機能を有するものであればソラレン自体でもその誘導体であってもよいが、好ましくは次式(I)、

【0012】

【化1】



【0013】

(式中、 R^1 、 R^2 、 R^3 はそれぞれ独立に、水素原子又は炭化水素基を示す。)

で表される化合物が挙げられる。

【0014】

前記一般式(I)における炭化水素基としては、例えば、炭素数1~30、好

ましくは1～20、より好ましくは1～10の直鎖状又は分枝状のアルキル基、より好ましくは低級アルキル基であり、炭素数2～30、好ましくは2～20、より好ましくは2～10の直鎖状又は分枝状のアルケニル基、炭素数5～30、好ましくは5～20、より好ましくは6～10の単環、多環又は縮合環式のシクロアルキル基、炭素数6～30、好ましくは6～20、より好ましくは6～10の単環、多環又は縮合環式のアリール基などが挙げられる。

【0015】

一般式(I)中の前記したアルキル基、アルケニル基、シクロアルキル基、アリール基などは、さらに置換基を有するものであってもよく、また、これらの基が相互に置換したものであってもよい。例えば、アルキル置換シクロアルキル基、アルキル置換アリール基、アリール置換アルキル基(アラルキル基)、シクロアルキルアルキル基などが挙げられる。

【0016】

その他の置換基としては、前記したアルキル基からなるアルコキシ基、アルキルチオ基、ジアルキルアミノ基、トリアルキルシリル基などの他に、塩素、臭素、フッ素などのハロゲン原子、メチレンジオキシ、2, 2-ジメチルメチレンジオキシ基などのアルキレンジオキシ基、シアノ基などが挙げられる。

好ましい置換基としては、メチル基、エチル基、n-プロピル基、イソプロピル基、t-ブチル基などの低級アルキル基、フェニル基、ナフチル基などのアリール基、メトキシ基、エトキシ基、n-プロポキシ基などの低級アルコキシ基、ジメチルアミノ基、ジエチルアミノ基、ジプロピルアミノ基などのジ低級アルキルアミノ基、トリメチルシリル基、トリエチルシリル基、ジメチルエチルシリル基、ジメチルト-ブチルシリル基などの低級アルキル置換シリル基、塩素、フッ素などのハロゲン原子、メチレンジオキシ、2, 2-ジメチルメチレンジオキシ基などのアルキレンジオキシ基、シアノ基などが挙げられる。

【0017】

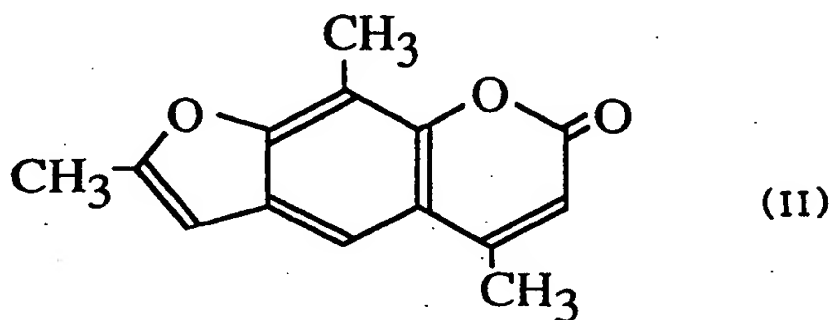
一般式(I)の R^1 、 R^2 、 R^3 の具体例としては、例えば、メチル基、エチル基、n-プロピル基、イソプロピル基、n-ブチル基、t-ブチル基、ヘキシル基などの低級アルキル基、ビニル基、プロベニル基、ブテニル基などの低級ア

ルケニル基、シクロヘキシル基、シクロペンチル基などのシクロアルキル基、フェニル基、ナフチル基などのアリール基、ベンジル基、フェネチル基などのアラキル基等が挙げられる。

本発明における好ましいソラレン誘導体としては、次式 (II)、

【0018】

【化2】



【0019】

で表されるトリメチルソラレン (TMP) が挙げられる。

【0020】

TMP (4-5'-8-trimethylpsoralen) は、紫外線照射によりDNA二重らせんを構成するピリミジン塩基と共有結合し、DNA二重鎖の間を架橋する。架橋された部分の周辺は生物本来のDNA組み換え修復機構により切り出され、結果として小規模な欠失を生ずる (Cimino, G. D. et al., (1985) Annu. Rev. Biochem., 54, 1151-1193.)。

欠失部に必須遺伝子が存在した場合、その機能が失われミュータントが現われる。ENUの点突然変異と異なり、染色体レベルの欠失という目印が付加されるので、特定の方法、例えば、RDA法 (Representational Difference Analysis) (Lisitsyn, N. et al., (1993), Science, 259, 946-951.) などで、変異部位近傍の染色体断片をクローニングした後、欠失部を求めて染色体上を検索 (Chromosomal walking) することにより変異遺伝子を同定し、クローニングすることが可能となる。

【0021】

本発明者らが行ったパイロットスクリーニングの結果、ソラレン誘導体、特にTMPを用いた遺伝子変異法においては、ENUと同程度のミュータント単離頻度を示すことがわかった。

TMPを用いた遺伝子変異法は、過去にカエノルハイブディティスエレガンス (*Caenorhabditis elegans*) で報告されている (Yandell, M. D. et al., (1994) Proc. Natl. Acad. Sci. USA, 91, 1381-1385.)。しかし、脊椎動物の遺伝子、特に脊椎動物の精子をTMPで処理し、人工受精で胚に変異を導入する本法は、過去に例がない新規な方法論である。この方法により、ゼブラフィッシュの網羅的な変異株の単離ばかりか、それらの変異遺伝子のクローニングによって、脊椎動物の全ての機能解析を分子レベルでおこなうことを可能にする意味で大きな独自性を持っている。

【0022】

ゼブラフィッシュの効率的な欠失変異法を開発するために、本発明者らはDNA架橋試薬であるTMP (Driever, W., Solnica-Krezel, L., Schier, A. F., Neuhauss, S. C. F., Malicki, J., Stemple, D. L., Stainier, D. Y. R., Zwartkruis, F., Abdelilah, S., Rangini, Z., Belak, J. and Boggs, C. (1996) A genetic screen for mutations affecting embryogenesis in zebrafish. Development 123, 37-46) による実験を行った。図1にこの実験方法の概要を示す。図1を簡単に説明する。AB系統の雄から採取された精子を、TMP溶液内においた後、紫外線照射された。処理後の精子は野生型の卵と人工受精され、変異処理されたゲノムをヘテロ (+/m) にもつF1個体に育てられた。F1個体は野生型AB系統 (+/+) と交配され、その半数が特定の変異遺伝子座をヘテロにもつF2集団を生み出した。F2子孫 (+/+または+/-) 同士の交配ペアの4組に1組の割合で、F3に1/4の比率で変異をホモ接合 (m/m) に持ち、変異体の表現型を発現する胚 (白色の胚) を生み出すペアができる。

【0023】

ゼブラフィッシュAB系統の雄を、0.03% (W/V) の3-アミノ安息香酸エチルエステルで麻酔し、スポンジブロックのスリットの上に仰向けにはさみ込んだ。3-5尾の雄から20ul用のキャピラリーで精液を吸引し、3ng/

mlから300 ng/mlのTMPと、1%ジメチルスルホキシド (DMSO) を含むハンク (Hank's) 食塩水100 μ lに懸濁した。5分間氷の上で静置した後、その懸濁液10 μ lずつを厚さ2ミリのプラスチック製ペトリ皿の上に滴下して並べ、DNA架橋器 (TFL-20M, VILBER LOURMAT社製、フランス) の紫外線照射装置の上に置き、波長312 nm、0.02 J/cm²の条件でペトリ皿の底越しに紫外線を照射した。

【0024】

変異誘発処理された精液を、AB系統の雌を麻酔して定法 (Stuemer, C. A. O. (1988) Retinotopic organization of the developing retinotectal projection in the zebrafish embryo. J. Neurosci. 8, 4513-4530) に沿って腹を弱く押して絞り出した新しい正常卵と人工受精した (第0日)。受精した卵を暗黒下で28度にて12時間置き、定法通り (Allende, M. L., Amsterdam, A., Becker, T., Kawakami, K., Gaiano, N. and Hopkins, N., (1996) Insertional mutagenesis in zebrafish identifies two novel genes, pescadillo and dead eye, essential for embryonic development. Gene Dev. 10, 3141-3155) F1個体に育てた。

TMPを添加していない他は同じ条件で処理されたものは、ほとんど全ての胚が成魚に育った (594例中、580例)。一方、30 ng/ml TMPで処理されたものは9日目までにわずか57% (650例中、371例)、300 ng/ml TMPで処理されたものでは9.5% (515例中、49例) しか生き延びなかった。

【0025】

30 ng/ml TMPで処理された精子から発生した胚の内、70%以上 (170例中、122例) が受精後2日目までにさまざまな奇形を示した。

一方で、TMPと紫外線両方または一方の処理をなくした条件では、奇形の個体はわずか (2%以下) であった。

【0026】

次に、特定の遺伝子座の変異頻度を測定することでTMP変異作成法の効率を調べるために、点々模様のゼブラフィッシュを用いてテスター変異についての実

験を行った。テスター変異は劣性で、単一遺伝子座由来であることを示すメンデル様式の遺伝をした。本発明者らは、AB系統の雄の精子を、 30 ng/ml と 300 ng/ml のTMPでそれぞれ処理し、テスター系統の雌の卵を人工受精した。30日後、 30 ng/ml のTMPでの処理由来のF1個体、1181例中6例が、また 300 ng/ml のTMPでの処理由来のF1個体、130例中3例が点々模様色素変異を示した。なお、紫外線照射のみで処理したF1では866例の中に色素変異を持った個体はゼロであった。その結果、変異頻度は、 30 ng/ml のTMPで0.5%、 300 ng/ml のTMPで2%と計算され、TMP変異法はゼブラフィッシュに極めて有効であることが示された。

【0027】

受精後1日から5日の間で、F3の胚に実体顕微鏡観察による形態と、接触刺激に対する応答によるスクリーニング（F2スクリーン、図1参照）を行ったところ、主に 30 ng/ml のTMPで処理された精子由来のF1、26個体から10系統の変異体を単離した。さらにF1個体の卵を機能不能の精子で活性化させて単異発生させた半数体のスクリーン（Stuemer, C. A. O. (1988) *Retinotopic organization of the developing retinotectal projection in the zebrafish embryo*. J. Neurosci. 8, 4513-4530）からも2系統単離した。得られた変異系統の内訳は次のとおりである。発育縮退（4系統）、小頭小眼（3系統）、不動（2系統）、心室拡張をともなう浮腫（1系統）、短身（1系統）、および視蓋壊死（1系統）。全ての変異体は劣性致死であり、メンデル様式の遺伝を示した。

【0028】

TMPによる変異法が十分に機能していることを確かめるため、本発明者らは神経系に異常を持つ2系統の変異体（j5とj10）をさらに詳しく解析した。無視蓋神経系（no tectal neuron）（ntnj5）変異体の胚の場合、だいたい40時間周辺で視蓋と眼に選択的に濁りが生じた。抗アセチル化チューブリンモノクローナル抗体（Sigma社）（Haffter, P., Granato, M., Brand, M., Mullins, M. C., Hammerschmidt, M., Kane, D. A., Odenthal, J., van Eeden, F. J. M., Jiang, Y.-J., Heisenberg, C.-P., Kelsh, R. N., Furutani-Seiki,

M., Vogelsang, E., Beuchle, D., Schach, U., Fabian, C. and Nüsslein-Volhard, C. (1996) The identification of genes with unique and essential functions in the development of the zebrafish, *Danio rerio*. *Development* 123, 1-36) で染色したところ、野生型の胚では37-39時間の間に著しく予定視蓋神経の軸索形成が進み、視蓋ニューロパイルを形成した(図2A)。しかし、無視蓋神経系(*ntn*)変異体の胚では他の部位では染色に違いは見られなかったが、予定視蓋の神経は同じ時期にほとんど発生が起こっていなかった(図2B)。これらの解析の結果は、*ntn*の変異は視蓋神経と眼の発生に影響を与えることを示す。*ntn*変異体は、これまでに報告されたいくつかの神経発生異常変異体(クラスIとIII)と、視蓋・眼が侵される点で共通している(Chen, C. and Tonegawa, S. (1997) Molecular genetic analysis of synaptic plasticity, activity-dependent neural development, learning and memory in the mammalian brain. *Annu. Rev. Ne*

【0029】

図2は、野生型(A)と無視蓋神経系(*ntn*) (B)の胚の発生38時間での抗アセチル化チューブリン抗体による予定視蓋神経の免疫染色を示したものである。側方からのカラー写真である。左側頭部先端。矢印は、TPC (The tracts of posterior commissures)を指す。「T」は、予定視蓋を示す。図2中のスケールバーは、100umを示す。

【0030】

本発明者らは、枝分かれ(*edawakare*) (*edwj10*)変異体を頭が小さく体の動かない変異体として見つけた。24時間周辺での尻尾への軽い接触に反応しない特徴と一致して、この変異体で最初にみつかった異常は感覚神経と筋肉であった。枝分かれ(*edw*)変異体では、発生20時間で、三叉神経節とローンビード(Rohon-Beard)感覚神経の末梢軸索の異常な進展がみられた。野生型では、発生28時間で三叉神経節細胞の末梢軸索は頭部後半の表皮と卵黄腔前半に投射していた(図3A)が、変異体ではもっと広範に投射し、頭部前半まで達していた。また、軸索は細かった(図3B)。

【0031】

発生28時間で、野生型のローンビード (Rohon-Beard) 神経はその末梢軸索を体側全体にほぼ腹側かつ尻尾側に向けて伸びていた (図3C) が、変異体ではさかんに分岐しさまざまな方向に伸びていた (図3D)。発生20時間で、野生型の形成途中の筋繊維は部分的に縞模様を現わしたが、変異体はまったく現わさなかった。枝分かれ (edw) 変異体では、野生型の骨格筋がはっきりと縞状構造を形成する36時間になっても変化はなかった。

【0032】

本発明者らはさらに、発生28時間で変異体の後方一次運動神経 (CaP) が異常であることを発見した。野生型では、CaP軸索は腹側筋節まで伸びるが (図3E)、枝分かれ (edw) 変異体の前方15個の筋節のCaP軸索の殆どは筋節の中ほどで伸長をやめていた (図3F)。

【0033】

図3は、発生28時間の三叉神経節感覚神経 (A及びB)、ローンビード (Rohon-Beard) 感覚神経 (C及びD)、そして、後方一次運動神経 (E及びF) の、野生型 (A、C及びE) および枝分かれ型 (edw) (B、D及びF) の胚の左側頭部先端の側方からのカラー写真である。図3の矢印の頭は、edw胚の抗進した感覚神経軸索 (B及びD) と、縮退した運動神経軸索 (F) である。図3のスケールバーは、100µm (A及びE)、50µm (C) である。

【0034】

ここで述べたすべての形質は、解析したすべてのedw変異体で再現してみられた。これらの結果は、edw変異が三叉神経節およびローンブレッド (Rohon-Beard) 感覚神経の投射のみならず体壁筋繊維の形成にも影響を及ぼすことを示唆する。

【0035】

また、CaP軸索の縮退は体壁筋の異常のせいと考えられる。これまでに数種の筋肉縞状構造ができない不動な変異体 (fub, fro, slo) が報告されている (Gaiano, N., Amsterdam, A., Kawakami, K., Allende, M., Becker, T. and Hopkins, N. (1996) Insertional mutagenesis and rapid cloning of ess

ential genes in zebrafish. Nature (London) 383, 829-832, Sladek, F. M., Melian, A. and Howard-Flanders, P. (1989) Incision by UvrABC excinuclease is a step in the path to mutagenesis by psoralen crosslinks in *Escherichia coli*. Proc. Natl. Acad. Sci. USA 86, 3982-3986)。しかし、感覚神経の異常についての報告はない。

【0036】

本発明者らは、DNA架橋試薬ソラレン誘導体を使って、脊椎動物であるゼブラフィッシュの高効率変異法の手法を開発した。特定遺伝子座の変異頻度や試験的スクリーニングで示されたソラレン誘導体による変異法の高い効率は、小規模であっても大量の数のゼブラフィッシュ変異体を単離することを可能にするだろう。

【0037】

30 ng/ml というソラレン誘導体の濃度はおそらく強すぎる。なぜなら、TMPによる実験においても、多くのF1胚がおそらく優性致死変異を持っていたため奇形を呈したからである。実際には、3 ng/mlの濃度のソラレン誘導体でも変異体の単離は効率的であった。

したがって、本発明の方法において使用されるソラレン誘導体、好ましくはTMPの濃度は、0.01~300 ng/ml、好ましくは0.1~100 ng/ml、より好ましくは0.1~50 ng/ml、さらに好ましくは1~30 ng/mlである。

【0038】

また、本発明の方法におけるソラレン誘導体の投与方法としては、前述したように精子に処理することもできるが、他の方法であってもよい。

本発明の方法においては、ソラレン誘導体で被検体を処理した後、紫外線、X線、ガンマ線などの高エネルギー線を照射する。これらの高エネルギー線は、被検体の種類やソラレン誘導体の種類や処理量などにより、適宜選択することができる。

本発明における脊椎動物は、ヒトを除く脊椎動物であって、例えば、魚類、哺乳類などが挙げられる。

【0039】

本発明の変異法の最も重要な特長は、ソラレン誘導体、特にTMPの作用の特性にある。紫外線照射によるTMPなどの活性化は、DNA二重らせん構造のピリミジン塩基との共有結合をもたらし、DNAに架橋を形成する (Driever, W., Solnica-Krezel, L., Schier, A. F., Neuhauss, S.C. F., Malicki, J., Stemple, D. L., Stainier, D. Y. R., Zwartkruis, F., Abdelilah, S., Rangini, Z., Belak, J. and Boggs, C. (1996) A genetic screen for mutations affecting embryogenesis in zebrafish. *Development* 123, 37-46)。DNA二本鎖の間の架橋部分の塩基切り出しと組み換え修復はしばしばゲノムDNAの小規模な欠失をもたらすことが大腸菌と線虫で知られている (Chitnis, A. B. and Kuwada, J. Y. (1990) Axonogenesis in the brain of zebrafish embryos. *J. Neurosci.* 10, 1892-1905、Furutani-Seiki, M., Jiang, Y.-J., Brand, M., Heisenberg, C.-P., Houart, C., Beuchle, D., van Eeden, F. J. M., Granato, M., Haffter, P., Hammerschmidt, M., Kane, D. A., Kelsh, R. N., Mullins, M. C., Odenthal, J. and Nuesslein-Volhard, C., (1996) Neural degeneration mutants in the zebrafish, *Danio rerio*. *Development* 123, 229-239)。そのような欠失は適切な方法の適用により変異遺伝子のクローン化に必要な指標となりうる。

【0040】

実際に、我々は同腹から生まれた変異体と正常個体のゼブラフィッシュの間でRDA (Representational Difference Analysis) (Cimino, G. D., Gamper, H. B., Isaacs, S. T. and Hearst, J. E. (1985) Psoralens as photoactive probes of nucleic acid structure and function: organic chemistry, photochemistry, and biochemistry. *Annu. Rev. Biochem.* 54, 1151-1193) を行い、edw変異体のゲノムに欠失しているDNA断片をクローン化することができた。

従って、本発明の変異法はゼブラフィッシュ変異体を単離し分子レベルで解析するために、ENU変異法 (Russell, W. L., Kelly, E. M., Hunsicker, P. R., Bangham, J. W., Maddux, S.C. and Phipps, E. L. (1979) Specific-locus test shows ethylnitrosourea to be the most potent mutagen in the mouse. P

roc. Natl. Acad. Sci. USA 76, 5818-5819, Wilson, S. W., Ross, L. S., Parrett, T. and Easter, S. S. Jr. (1990) The development of a simple scaffold of axon tracts in the brain of the embryonic zebrafish, *Brachydanio rerio*. Development 108, 121-145) や挿入変異法 (Mullins, M. C., Hammerschmidt, M., Haffter, P. and Nüsslein-Volhard, C. (1994) Large-scale mutagenesis in the zebrafish: in search of genes controlling development in a vertebrate. Curr. Biol. 4, 189-202) に加えて価値あるアプローチのしかたになる。

【0041】

【実施例】

本発明を実施例により具体的に説明するが、本発明はこれらの具体例に限定されるものではない。

【0042】

実施例 1

ゼブラフィッシュ AB 系統の雄を、0.03% (W/V) の 3-アミノ安息香酸エチルエステルで麻酔し、スポンジブロックのスリットの上に仰向けにはさみ込んだ。3-5尾の雄から 20 μ l 用のキャピラリーで精液を吸引し、3 ng/ml から 300 ng/ml の TMP と 1% ジメチルスルホキシド (DMSO) を含む Hank's 食塩水 100 μ l に懸濁した。

【0043】

5 分間氷の上で静置した後、懸濁液 10 μ l ずつを厚さ 2 ミリメートルのプラスチック製ペトリ皿の上に滴下して並べ、DNA 架橋器 (TFL-20M, Viller Lourmat 社製、フランス) の紫外線照射装置の上に置き、波長 312 nm、0.02 J/cm² の条件でペトリ皿の底越しに紫外線を照射した。変異誘発処理された精液を AB 系統の雌を麻酔して定法に沿って腹を弱く押して絞り出した新しい正常卵と人工受精した (第 0 日)。受精した卵を暗黒下で 28℃ にて、12 時間置き、定法通り F1 個体に育てた。

【0044】

その結果、30 ng/ml の TMP で処理されたものは 9 日目までにわずか 5

7% (650例中、371例)、300 ng/mlのTMPで処理されたものでは、9.5% (515例中、49例)しか生き延びなかった。

30 ng/mlのTMPで処理された精子から発生した胚の内、70%以上 (170例中、122例)が受精後2日目までにさまざまな奇形を示した。

【0045】

比較例1

TMPを添加しない他は同じ条件で、実施例1と同様に処理した。その結果、ほとんど全ての胚が成魚に育った (594例中、580例)。

また、TMPと紫外線両方または一方の処理をなくした条件では、奇形の個体はわずか (2%以下)であった。

【0046】

実施例2

点々模様のゼブラフィッシュを用いて実施例1と同様に処理してテスター変異を行った。

AB系統の雄の精子を、30 ng/mlと300 ng/mlのTMPでそれぞれ処理し、テスター系統の雌の卵を人工受精した。30日後、30 ng/mlのTMP処理由来のF1個体1181例中6例が、また、300 ng/mlのTMP処理由来のF1個体130例中3例が点々模様の色素変異を示した。

なお、紫外線照射のみで処理したF1では、866例の中に色素変異を持った個体はゼロであった。その結果、変異頻度は、30 ng/ml TMPで0.5%、300 ng/ml TMPで2%と計算され、TMP変異法はゼブラフィッシュに極めて有効であることが示された。

【0047】

受精後1日から5日の間で、F3胚に実体顕微鏡観察による形態と、接触刺激に対する応答によるスクリーニング (F2スクリーン)を行った。主に30 ng/mlのTMPで処理された精子由来のF1、26個体から10系統の変異体を単離した。

さらに、F1個体の卵を機能不能の精子で活性化させて単異発生させた半数体のスクリーンからも2系統単離した。得られた変異系統の内訳は次のとおりであ

る。發育縮退（4系統）、小頭小眼（3系統）、不動（2系統）、心室拡張をと
もなう浮腫（1系統）、短身（1系統）、および視蓋壊死（1系統）。全ての変
異体は劣性致死であり、メンデル様式の遺伝を示した。

【0048】

TMPによる変異法がうまく機能していることを確かめるため、神経系に異常
を持つ2系統の変異体（j5とj10）をさらに詳しく解析した。結果をカラー
写真として図2に示す。

【0049】

別の変異体として、枝分かれ（edawakare（edwj10））変異体
を頭が小さく体の動かない変異体として見つけた。24時間周辺での尻尾への軽
い接触に反応しない特徴と一致して、この変異体で最初にみつかった異常は感覚
神経と筋肉であった。このedw変異体と野生型の、三叉神経節とローンブレッ
ド（Rohon-Beard）感覚神経の末梢軸索、及びCaP軸索の異常な進
展のカラー写真を図3に示す。

【0050】

【発明の効果】

本発明は、効率の良い脊椎動物、特にゼブラフィッシュ（zebrafish）の変異
体の作出系を提供するのみならず、染色体に小規模の欠失を誘発するので、正常
染色体と比較することで欠失部を目印に、変異遺伝子のクローニングが可能とな
ること、及び、小規模であっても多数のクローニング可能なミュータントが作出
できるという特徴を有する方法を提供するものである。

【図面の簡単な説明】

【図1】

図1は、TMP変異法の模式図を示す。

【図2】

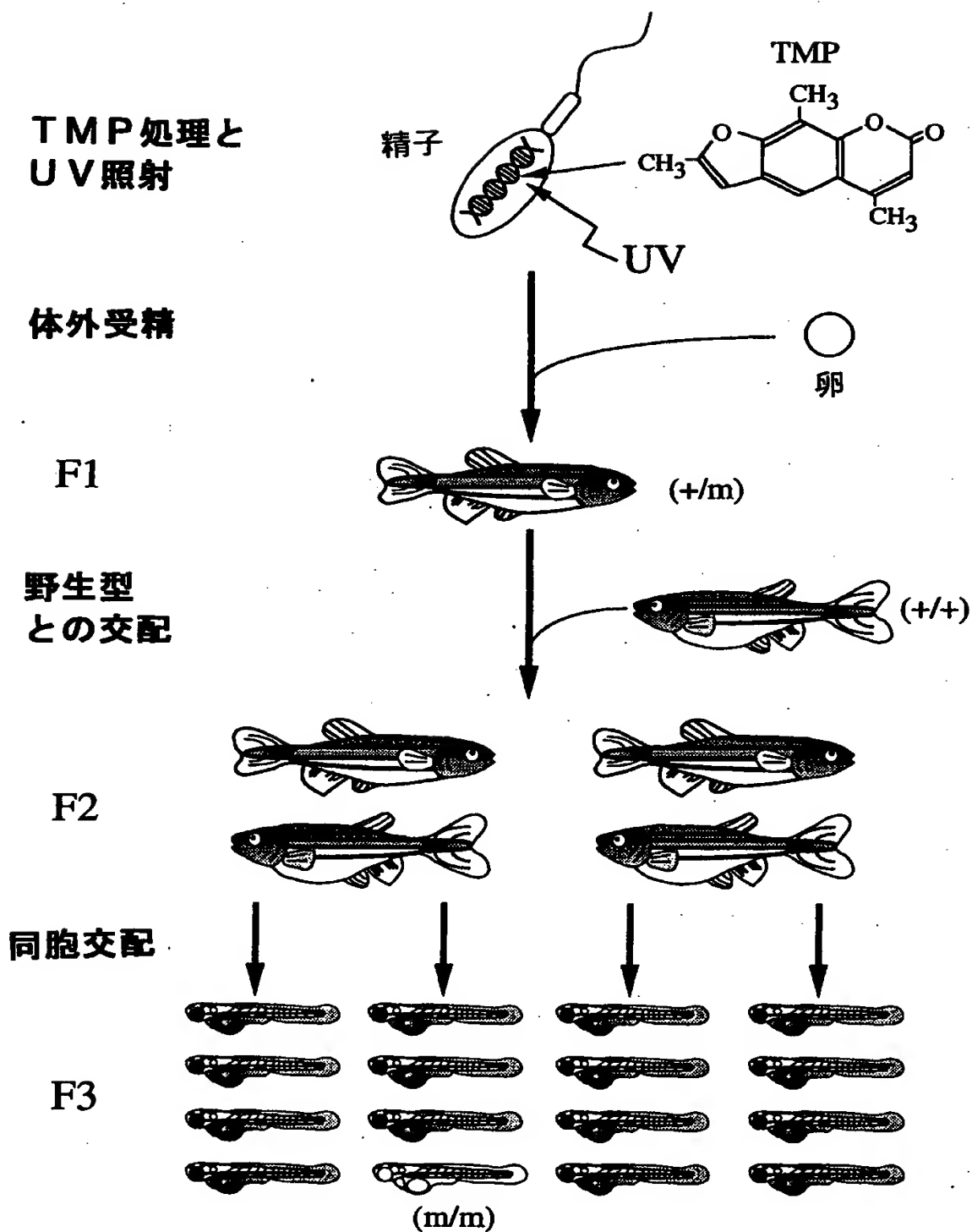
図2は、野生型（A）とntn（B）胚の発生38時間での抗アセチル化チュ
ーブリン抗体による予定視蓋神経の免疫染色の側方からの図面に代わる写真であ
る。

【図3】

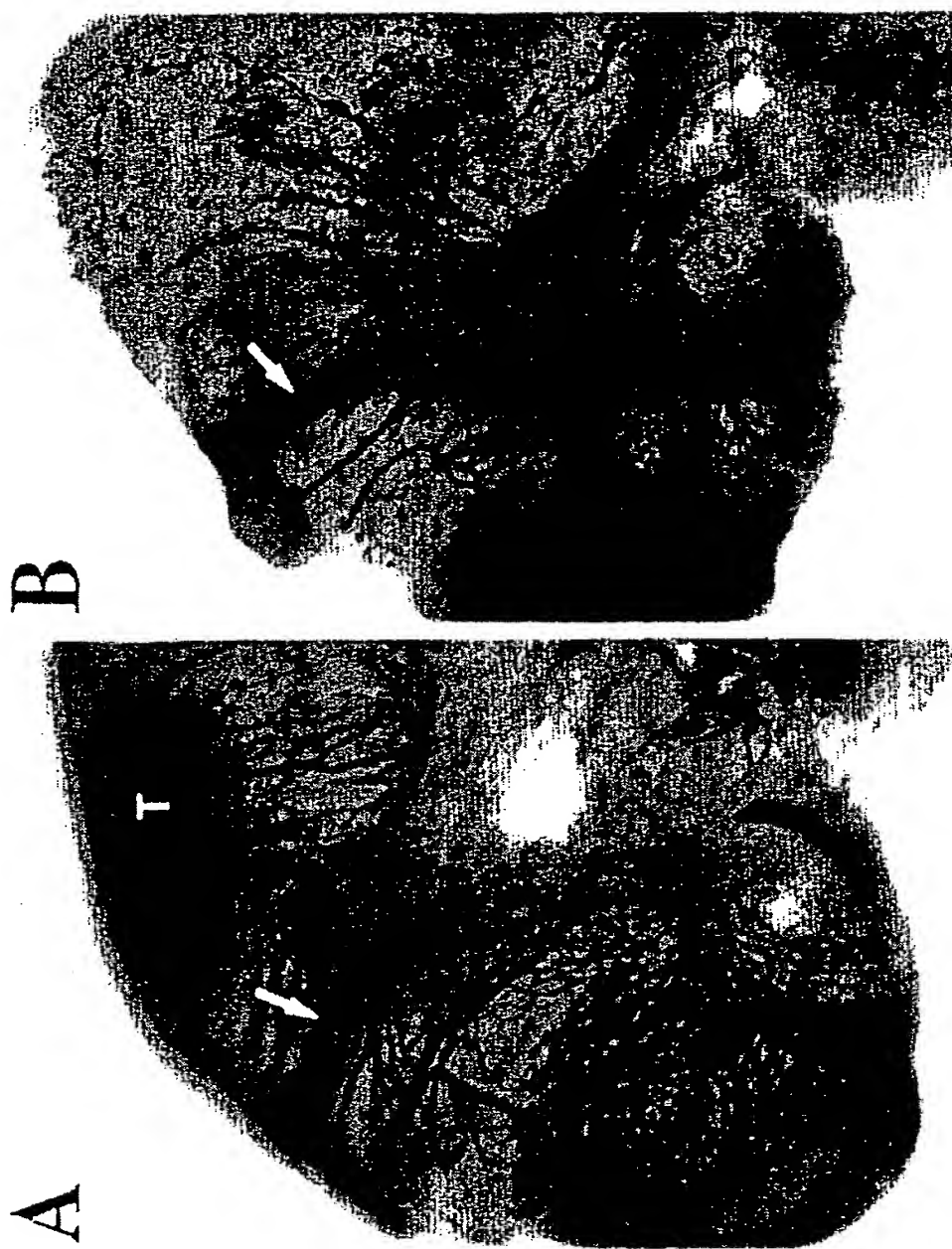
図3は、発生28時間の三叉神経節感覚神経（A，B）、Rohon-Bear
rd感覚神経（C，D）、そして後方一次運動神経（E，F）の野生型（A，
C，E）およびedw（B，D，F）胚の側方からの左側頭部先端の図面に代わ
る写真である。

【書類名】 図面

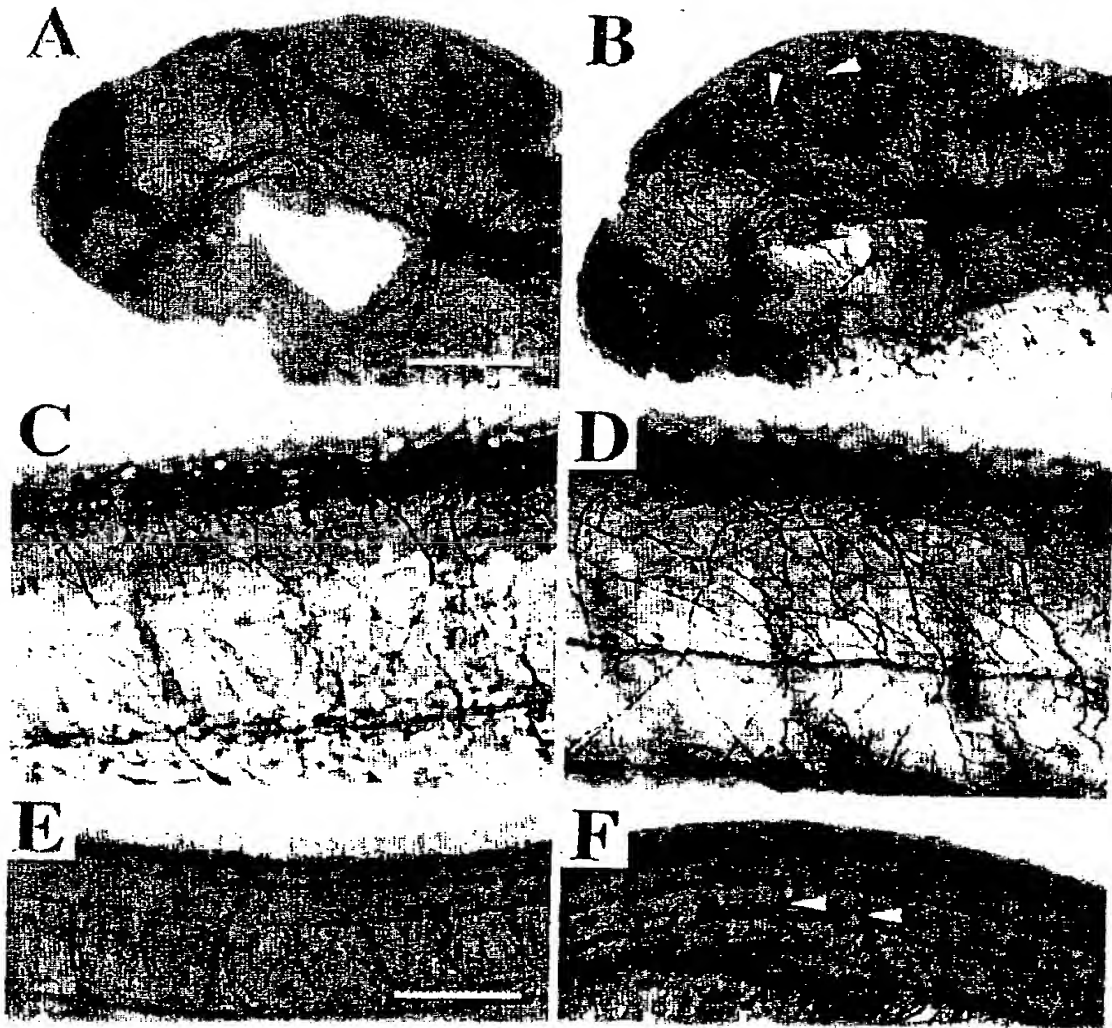
【図 1】



【图2】



【図3】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 本発明は、脊椎動物の遺伝子を特異的に変異させる方法を提供する

。 【解決手段】 本発明は、ソラレン誘導体、好ましくはトリメチルソラレンを用いて脊椎動物の遺伝子を特異的に変異させる方法に関する。

【選択図】 なし

【書類名】
【訂正書類】

職権訂正データ
特許願

<認定情報・付加情報>

【特許出願人】

【識別番号】

396020800

【住所又は居所】

埼玉県川口市本町4丁目1番8号

【氏名又は名称】

科学技術振興事業団

【代理人】

申請人

【識別番号】

100102668

【住所又は居所】

東京都中央区日本橋3丁目15番2号 高愛ビル9
階 たくみ特許事務所

【氏名又は名称】

佐伯 憲生

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [396020800]

1. 変更年月日	1998年 2月24日
[変更理由]	名称変更
住 所	埼玉県川口市本町4丁目1番8号
氏 名	科学技術振興事業団